

赤谷の森だより

AKAYA
PROJECT

赤谷プロジェクト地域協議会
財団法人自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第10号



コラム* 赤谷の森から

環境の時代における

全国初の取り組み

赤谷プロジェクト地域協議会

河合 明 宣



新年明けましておめでとうございます。

私が住むみなかみ町新治地区（旧新治村）は、北は分水嶺三國山脈、東は大峰山、西は稲包山から南山に続く山々に囲まれ、西川と須川を集めた赤谷川が地域の中央を流れ去ります。川沿いには階段状に平地が広がりますが、地区内で田畑の面積は9%弱、85%を森林が占め、その85%が国有林です。これは昭和55年に赤沢スキー場がオープンした時の統計です（『新治村総合計画』より）。

旧新治村では、天然（地域）資源は水源・温泉水と森林のみで、昭和33年に竣工した相俣ダム（赤谷湖）によって水源の多目的利用が始まりました。また、国有林で働く人々の冬季の雇用確保のために、全国で初めて国有林をスキー場のために貸し付けたのが赤沢スキー場です。相俣ダムは西川及び川古ダム建設要請に、赤沢スキー場は猿ヶ京スキー場誘致につながっていました。

こうした発展の方向は地域資源を利用する形ではありませんが、いきおい大規模開発となり、財源や経営は外部の人や組織に依存せざるをえません。地域の身の丈に合わない規模の開発は、安全でおいしい飲料水を安定して供給する水源地など、先祖から受け継がれたかけがえのない貴重な資源を、地元の手から引き離してしまう心配もありました。

今、「赤谷の森」では水源・温泉水の保全など、森林が私たちにもたらす豊かな恵みの回復を目的に、一度は造林された国有林を豊かな自然の森に還元する全国初めての取り組みが進んでいます。森林面積・国有林面積が多いこの地域で、再び全国初の取り組みが行われ、新しい国有林と地域の関係づくりのために英知が集められています。みなかみ町の特徴を活かすとともに、この先進的取り組みを成功させ、他の地域におけるモデルとなることが大いに期待されます。

赤谷プロジェクト紹介

赤谷プロジェクトと

地域づくり

—旧三国街道の活用を通じて—

日本人は古来から、森と密接なかかわりを持ってきた国民です。森からの恵み——水は人の生命を支え、材木は建築材や家具となり、山菜やけもの肉は食卓をにぎわせ、立派に育った林は裏山の大きな崩れを防ぎ、かんじきや茅葺き屋根など生活に欠かせない道具の材料はすべて山から採取してきたもの——は生活の隅々にまで行きわたっていました。

■新治地区と三国街道のかかわり

先にあげたような森からの恵みは、全国的に見られるものですが、一方で地域に固有の森と人とのかわりは、その地域の風土や文化、精神を形づくってきました。「赤谷の森」の歴史や地元の文化を語る際に忘れてはならないのは、三国街道の存在でしょう。アスファルト舗装が施されて路線が現代的に整備された国道17号線がありますが、現在の路線は、かつての三国街道（旧三国街道）に沿ってつくられたものです。

三国街道は、江戸（現在の東京）と越後（現在の新潟）を結ぶ道で、東海道や中山道といった「五街道」に続く重要な街道として大きな役割を果たしていました。「三国峠越え」は、永井宿から峠にかかり8kmで三国峠に達し、越後浅貝宿に至る十数kmをい

います。街道は奈良から平安時代にかけて開かれたと伝えられ、戦国時代に越後と上州を幾度となく往復した上杉謙信が三国峠を整備し、峠越えをする人が急増したといわれます。現在の国道17号線がそうであるように、かつての三国街道も日本の産業、経済、文化、人の往来の大動脈であったのです。

時代が変わり、徒歩や馬による移動から、鉄道が発達すると三国街道を利用する人々は減少しますが、三国街道は明治から昭和にかけて、与謝野晶子、若山牧水、直木三十五、川端康成、司馬遼太郎、藤沢周平等のすぐれた文人によって語り継がれ、現在は一部が中部北陸自然歩道に指定され、「三国路自然歩道」と名前を変えて、四季折々の自然で来訪者を楽しませています。

■旧三国街道フットパス網計画

赤谷プロジェクトでは、旧三国街道を中心とする地域を、地域社会の歴史性・精神性をも支える自然環境と考え、自然の豊かさを損なうことなく、永続的に多くの人々が楽しめるような教育や観光利用のあり方を考える場としています。そこで2005年から、網の目のように刻まれた旧街道・生活道路の活用を考える「旧三国街道フットパス網計画」を赤谷プロジェクトの事業に取り入れて、赤谷プロジェクト地域協議会のメンバーを中心に自主勉強を進めてきました。そして2007～8年度にかけて、様々な現況調査や活用計画の検討を行っています。

「フットパス」とは、イギリスなどでみられる全国に張り巡らされた歩道のことです。赤谷プロジェクトでは、この歩道網に現れたイギリス人の考えを見習い、人が道を歩くことの楽しみや価値を確立し、そのための管理計画や環境保全の取り組み、道標や地図の整備、おすすめる散策コースの選定などを

一体的に行うことにしました。プロジェクトが進める生物多様性の保全・復元活動から得られる情報を活用して、旧三国街道を中核としたフットパス網の魅力を上げていきたいと考えています。

■フットパス網計画の活動

旧三国街道のフットパス網の魅力を高めるための管理計画を検討するために、街道と周辺の生活道の現状把握と、地域社会との協働を進めていく観点から、

- ・ 全国で統一された評価基準を用いた歩道調査
- ・ 地域住民・関係者への聞き取り
- ・ 自然科学系のモニタリング調査

・ 企画段階からの地域住民参加ワークショップを実施しました。この活動は、赤谷プロジェクトに設置された、地域づくりワーキンググループ（座長・土屋俊幸）によって行われ、多くの地域住民の方々のご参加をいただきました。この場を借りて感謝いたします。



ワークショップの様子

旧三国街道フットパス網(2008年8月時点)



中でも、地域住民の方々延べ77名に参加していた「だいたワークショップ(素材を持ち寄って具体的に議論する場)」は、多くの収穫がありました。約半年にわたる期間に4回、公開の場で直接意見交換しながら、具体的な利点・問題点等について議論すると同時に、地域社会の中で旧三国街道をよく知る人材、埋もれてしまった歴史・話などの掘り起こしをねらいとして実施しました。

ワークショップでは、現状を知るための調査結果や地域住民の考えを持ち寄り、現状の中で、評価できる点、改善が必要な点を整理しています。

(主な評価できる点)

- ・ 現段階での旧三国街道フットパス網の各ルート(地図中、赤色のルート)は、全国的にもかなり整備された歩道として評価できる。
- ・ 自然、歴史、文化の面から教材化が可能な素材が多く残っている。

(主な改善が必要な点)

- ・ 猿ヶ京地区や永井地区と三国峠周辺を結ぶ公共交通機関がなく、アクセスが良好でない。利用者は、三国トンネル周辺の出入口へは、マイカーやタクシー、各宿泊施設のマイクロバスで移動している。
- ・ 国道との合流地点にはいずれも標識がなく、歩行者が往来することを注意喚起するための施策が必要。

・ 「赤谷の森」の多様な生態系を身近に感じることのできる環境であり、地図やインターネットによる情報発信に加えて、訪れた人々、地元住民が日々移り変わる情報に接することのできる、情報拠点があると望ましい。

・ 初心者から山歩きに慣れている人まで、様々なニーズに合わせたコースが設定できるようなフットパスが網の目となるような工夫(他の歩道の活用など)が必要。

今後、赤谷プロジェクトに関係する人々や他の機関の協力を得ながら、先に挙げた課題を解決し、旧三国街道をより魅力あるものとしていく必要があります。

地域発のエコツーリズムへ

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかたを「エコツーリズム」といいます。

旧三国街道は、古くから人々の往来の拠点でした。江戸時代の人々は、参勤交代や米の輸送など、仕事での往来が中心で、観光という考え方は少なかったでしょうが、街道筋の住民は、訪れた人々をもてなすという行為を当然のようにしていたと考えられます。

環境、生活の質の時代と言われる今、来訪客のニーズはかつてと大きく変わってきています。旧三国街道の現代的な活用を通じて、来訪客のおもてなしのあり方を、改めて考える時が来ているように思います。旧街道を一つの手がかりとして、地域の人々自身が地域固有の文化や森と人とのかわりを再発見することを通じて、人々の暮らしと結びついた新しい地域発のエコツーリズムが次第に形づくられていくのだと思います。赤谷プロジェクトでは引き続き旧三国街道エリアを拠点のひとつとして、教育・観光のあり方を考えていきます。皆様の参加を今後とも願います。



茅野恒秀
(財)日本自然保護協会



土屋俊幸
自然環境モニタリング
会議委員及び地域づくり
ワーキング座長、
東京農工大学教授

赤谷プロジェクトの 支援者紹介

赤谷プロジェクトは、地域住民で組織された赤谷プロジェクト地域協議会、林野庁関東森林管理局、(財)日本自然保護協会の3団体が中核団体となって運営されるのですが、その活動は全国のような支援者・協力者に支えられています。ここでは、外部からの協力・支援の例をご紹介します。

■研究者・研究団体による協力

「赤谷の森」の自然をよく知り、森からの恵みが最も多い状態が続くような管理の方法をつくる活動には、様々な分野の科学に基づく知識が必要です。赤谷プロジェクトには、東京農工大学、国士館大学などの大学に所属する研究者だけでなく、民間企業や研究団体に所属する方々も、研究メンバーとして活動しています。

また、組織として赤谷プロジェクトへの協力を行っている例には、日本全国のイヌワシ研究者のグループである「日本イヌワシ研究会」の取り組みがあります。



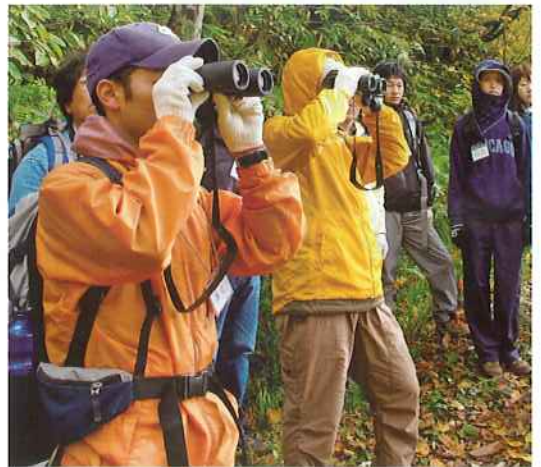
■企業による協力

大阪に本社を持ち、カタログ『ベルメゾン』などの通信販売事業を行っている、株式会社千趣会(せんしゅかい)からは、地球環境保全に積極的に取り組むため、2006年から赤谷プロジェクトを支援いただいています。(財)日本自然保護協会の活動に協賛するほか、本社のある大阪で行われるイベントやインターネットなどで、赤谷プロジェクトの取り組みを広く紹介して下さっています。



2008年6月、大阪市内で行われたイベントでの、千趣会による赤谷プロジェクト紹介の様子

株式会社ニコン(本社・東京)はカメラ製品などの精密機器メーカーですが、赤谷プロジェクトに対し2003年から調査研究活動や環境教育活動を支援していただいています。特に双眼鏡、望遠鏡やカメラなどの製品の提供により、プロジェクトメンバーの調査研究活動がより充実するようになりました。



ニコンから提供された機材を使った猛禽類調査の様子

2007年5月から2008年8月まで、旧三国街道フットパス網計画(2、3ページ参照)の活動に協力して下さったのは、経営コンサルティングを行うアクセンチュア株式会社(本社・東京)です。旧三国街道エリアの自然や文化を調べて、その成果を地図やインターネットに発信するための活動に対する支援を受けました。

この他、赤谷プロジェクト地域協議会が主催して、新治地区北部の水源であるムタコ沢周辺の森の整備をすすめる「ムタコの日」の活動は、全労済(全国労働者共済生活協同組合連合会)が、地域の人々が助け合って環境を守る活動に支援をする「2008年全労済地域貢献助成事業」の助成を受けて行われています。

赤谷プロジェクトは、日本の森林の管理や地域づくりのモデルとして全国的に注目されています。今後も、地元で広がる活動の輪をより大きくしていくために、様々な支援を得て進めていきます。

特集 地域づくりの取り組み

旧三国街道の活用検討に、地元住民が参加しています

新潟県との県境から、猿ヶ京地区へ通ずる旧三国街道（三国路自然歩道）のより良い活かし方を、赤谷プロジェクトの視点から考える「旧三国街道フットパス網計画」には、赤谷プロジェクト・地域づくりワーキンググループ（座長・土屋俊幸（東京農工大学教授））のメンバーを中心に、大勢の地元住民が参加しています。

■ワークショップの開催

2007年の8月から2008年の1月まで、この活動の企画やあり方を考えるワークショップ（素材を持ちよって相談をする機会）を開催しました。ワークショップには徐々に参加者が増え、4回の開催で延べ77人が参加しました。

第1回、第2回のワークショップは旧三国街道の利用や整備の現状に関する資料を使い、良いところや改善を必要とするところを評価しました。

第3回のワークショップでは、かつては採草地への道だった猿ヶ京（テルメ国境付近）と治部間の歩道から、唐沢山く大般若塚く永井宿く猿ヶ京のコースを実際に歩きました。

第4回は、半年間に集めた情報を元に、旧三国街道のより良い活かし方についてグループに分かれて議論を行いました。



第4回ワークショップの様子（2008年1月）



第3回ワークショップの様子（2007年10月）

参加者の声…

生津 秀樹さん（猿ヶ京地区）

旧三国街道は今までほとんど歩いたことがありませんでしたが、猿ヶ京の今後を考えると、何人かと歩いたり、地元の山を登るようになっていました。自分たちが楽しめるように思います。山奥でも秘境でも紹介できると思います。山奥でも秘境でもない「ふるさと」、人がいて山もあることが、他にはない猿ヶ京の魅力です。

笹木 坦さん（猿ヶ京地区）

赤谷プロジェクトでの旧三国街道を対象にした活動は、地域の人々が地域づくりについて話がしやすい鍵をつくってくれたように思います。これを機に、地域がどんどん話し合っていくことを希望します。そうは言っても、旧三国街道を歩いたことがないという人もいます。まずは歩くことから始めてみてはと思います。

林 ふさ子さん（羽場地区）

私はとにかく自然が大好きで、三国峠、新治地区が好きなのです。三国峠のいいところは、奈良・平安時代から人々に使われていて、とても歴史が古いこと。人も多く通っていて文学作品も残っています。歴史と文学と植物の3つが素晴らしいです。こんなにいい生きた教材はないと思います。教育と観光に上手に活用すればいいと思います。



最近の活動紹介 & 活動のご案内

これまで実施した取組

●新治小学校へ森林環境教育の協力

みなかみ町立新治小学校の6年生約80名が10月21日(火)、旧三国街道を遠足で歩きました。赤谷プロジェクトからは、赤谷プロジェクト地域協議会の会員の皆さんと赤谷森林環境保全ふれあいセンター(略称赤谷センター)が協力しました。

当日は、快晴で紅葉も美しく、絶好の遠足日よりとなりました。遠足は、三国トンネルの新潟県側の登山口を10時に出発し、三国峠～三国山～三国峠～三国トンネルの群馬県側登山口までの路程



地域協議会の長浜さんが赤谷の森の自然を解説しています

で、終点には15時30分に到着しました。当日は4班に分かれ、各班には先生の引率の他に、赤谷プロジェクト地域協議会、赤谷

センター、地元ボランティアが付き添いました。移動する途中、地域協議会の長浜陽介さん(後閑地区)が、赤谷の森の自然について解説をしました。



地域協議会の林泉さんが旧三国街道の歴史を説明しています

三国峠にある御坂三社神社(三国権現)では、赤谷プロジェクト地域協議会の林泉さん(赤谷地区)が、三国峠の歴史を、上杉謙信の関東出兵との関わり等を交えて解説しました。

そのあと、赤谷センターが、野生動物の体温を感知して撮影するセンサーカメラについて説明し、三国峠から降りる途中で、各班1台ずつのカメラを森林の中に設置しました。



森の中にセンサーカメラを付けました
ホンドテンなどの動物が写っていました

みなさん、どんな動物が写っているか大変楽しみしていました。設置したカメラは1ヶ月後に回収し、フィルムを現像したところ、ホンドテ

ンヤツキノワグマなどの動物たちが写っていました。

生徒さんからは、「新潟県と群馬県で森に違いがありおもしろかった」、「動物カメラの設置がおもしろかった」、「とてもきれいな景色で、いろいろな植物を発見できて楽しかった」等の感想がありました。

新治小学校統合後はじめての遠足でしたが、和気あいあいとした雰囲気ですぐ元気づく遠足を終えました。この遠足をきっかけに地元の自然や歴史に関心を深めてもらいたいと思います。



撮影されたホンドテンの写真です



三国権現の前で記念撮影をしました

●「環境教育・関東ミーティング2008AKAYA」が猿ヶ京小学校で開催されました

関東周辺で環境教育活動に取り組み方々や環境教育に関心をもつ方々が情報共有・研修・交流する機会として、「環境教育・関東ミーティング2008AKAYA」が、みなかみ町の旧猿ヶ京小学校を会場に11月28日（金）から30日（日）まで開催され、130名を超える環境教育関係者が参集しました。

今回から、みなかみ町の赤谷の森（国有林）で取り組まれている赤谷プロジェクトの関係者が実行委員会に参画し、赤谷プロジェクトの目標である生物多様性の復元や持続的な地域づくりをテーマにすることとなり、環境教育ミーティングのテーマは、「多様な自然の気づき方、伝え方、エコリズムへのつなげ方」生物多様性の保全活動と環境教育活動を考える」となりました。

共催は、(財)日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局、(社)日本環境教育フォーラムで、後援が環境省、群馬県、みなかみ町等です。

1日目のオープニング全体会では、観光カリスマでスイスで活動をされている山田桂一郎さんから話題提供がありました。スイスのツェルマットの事例を中心に、お客が選ぶ観光地域の条件について、地域らしさ等のプレミアム（差別的優位）を地域の関係者が連携して提供できる仕組みづくりの必要性を説明されました。

その後、藤江達之さん（関東森林管理局計画部長）、高田武志さん（株）八ヶ岳高原ロッジ）、宮本英樹さん（NPOねおす）から、それぞれ話題提供のあと鼎（てい）談をおこないました。関係者間の連携や意見調整の難しさについて話し合われました。



鼎談の様子です



分科会では地域協議会の岡村建さんが温泉や地元の自然の話をしました

2日目は、6テーマの分科会を実施しました。分科会「地元誌・民俗からたどる自然と人」では、赤谷の森周辺の地元誌や民俗について参加者と情報交換し、自然と人とのかわりを教育関係者などのように主題化するか考えました。地元からは、河合明宣さん（司会、地域協議会、放送大学教授）、持谷靖子さん（いはるこども文化塾）、笹木坦さん（猿ヶ京関所資料館）が出演しました。

分科会「里山の森における環境教育」行政の役割を探る」では、松本廣（関東森林管理局指導普及課長）、深町加津枝（京都大学大学院准教授）、大石康彦（独）森林総合研究所多摩森林科学園グループ長）によりテーマに沿った話題提供とディスカッションが行われました。その中で、環境教育に携わる関係者間の地域ネットワークを支援していくことに行政の果たす役割があるのではないかなど、活発な意見交換がありました。

3日目のエンディング全体会では、2日目の各分科会の報告のあと、地元食材を利用した昼食パーティーで交流を図り、無事、成功裏に終了しました。

今回のミーティングにおいて、関東圏で活動する環境教育に取り組んでいる幅広い関係者が交流

を深め、その経験や知見について学ぶことができました。これらの成果は、赤谷プロジェクトの環境教育の取り組みの中でも活かしてまいります。

今後のイベント紹介

●NHKの子供向け教育番組「モリゾー・キッコロ 森へいこうよ！」の撮影が「赤谷の森」で進められ順次放送されています。番組では、プロの自然案内人（佐々木洋さん）と地元新治小学校の子供たちが「赤谷の森」の自然や動物の四季を楽しく紹介しています。今後の放送スケジュールは、次のとおりです。是非、放送をご覧になってください。

放送スケジュール（予定）

NHK教育 / 土曜午前9:50~10:05

2月28日、3月7日

テーマは未定



いきもの村での撮影風景

編集部

だより

新年を迎え、関係者一同、気持ちを新たに赤谷プロジェクトのテーマである生物多様性や地域づくりに取り組んでまいります。今後も引き続き皆様のご支援をよろしくお願いたします。（赤谷の森のツツペ）